

「極みの愛」

さて、過越の祭りの前のこと、イエスは、この世を去って父のみもとに行く、ご自分の時が来たことを知っておられた。そして、世にいるご自分の者たちを愛してきたイエスは、彼らを最後まで愛された。夕食の間のこと、悪魔はすでにシモンの子イスカリオテのユダの心に、イエスを裏切ろうという思いを入れていた。イエスは、父が万物をご自分の手に委ねてくださったこと、またご自分が神から出て、神に帰ろうとしていることを知っておられた。イエスは夕食の席から立ち上がって、上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。それから、たらいに水を入れて、弟子たちの足を洗い、腰にまとっていた手ぬぐいでふき始められた。こうして、イエスがシモン・ペテロのところに来られると、ペテロはイエスに言った。「主よ、あなたが私の足を洗ってくださるのですか。」イエスは彼に答えられた。「わたしがしていることは、今は分からなくても、後で分かるようになります。」ペテロはイエスに言った。「決して私の足を洗わないでください。」イエスは答えられた。「わたしがあなたを洗わなければ、あなたはわたしと関係ないことになります。」シモン・ペテロは言った。「主よ、足だけでなく、手も頭も洗ってください。」イエスは彼に言われた。「水浴した者は、足以外は洗う必要がありません。全身がきよいのです。あなたがたはきよいのですが、皆がきよいわけではありません。」イエスはご自分を裏切る者を知っておられた。それで、「皆がきよいわけではない」と言われたのである。イエスは彼らの足を洗うと、上着を着て再び席に着き、彼らに言われた。「わたしがあなたがたに何をしたのか分かりますか。あなたがたはわたしを『先生』とか『主』とか呼んでいます。そう言うのは正しいことです。そのとおりなのですから。 ヨハネ福音書 13 章 1～13 節

イエスは、十字架にかかる前夜、弟子たちと過ぎ越しの食事を共にしました。いわゆる「最後の晩餐」です。

その最後の晩餐の中で語られたイエスの「最後の説教」が、ヨハネの福音書 13 章から 17 章に亘って記されています。

そして、最後の晩餐の用意が整った時、まずイエスが行ったのは弟子たちの足を洗うという事でした。今回は、この洗足の出来事を通して、イエスの愛の深みへと導かれてまいりましょう。

この愛で十分

「さて、過越の祭りの前のこと、イエスは、この世を去って父のみもとに行く、ご自分の時が来たことを知っておられた。そして、世にいるご自分の者たちを愛してきたイエスは、彼らを最後まで愛された。」（1）

「最後まで愛された」という箇所は、他では「極みまで愛された」「その愛を残すところなく示された」などと訳されています。

この「最後まで」ということばは、原語では「エイス・テロス」です。このことばには、時間的な「最後まで」という意味と、「成し遂げる、完了する」などという意味があります。

イエスは、この地上における生涯にわたり弟子たちを愛しました。十字架の上での最後の一息までその愛を貫いたのです。しかも、ご自身の愛を残すところなく、極みまでも、すべてを与え尽くしたのです。私たちに対する神の愛は、極みまで与え尽くされたのです。その頂点が十字架です。

しかし、その十字架の救いを信じているクリスチャンであっても、どこかにまだ愛が足りないという感覚を持っている場合があります。そこで愛されるために（理解され、評価され、認められるために）奉仕して、伝道して、学んで、頑張っている場合があります。あるいは、まだ足りない、まだ足りないと、より刺激的なしるしを求めて集会をさまよう場合があります。しかし、主はすでにその愛を残すところなく、極みまでも与え尽くしてくださったのです。

もし足りないと感じているとするなら、それは主の愛が足りないのではなく、与えられている愛を受け取り損ねているからです。つい先日も、眼鏡がない眼鏡がないと探していたのですが、すでに眼鏡をかけていることに気づくなどということがありました。

有るものを有ると気づかなければ、いつまでも見つけることはできません。イエスは、すでに十字架で「完了した」（テロスの動詞テレオー）と言われました。この十字架にこそ、イエスの愛は、残すところなく、極みまで現わされ、完了したのです。

私たちは、愛されるためにこれ以上何を求めるのでしょうか。イエスの命だけでは不十分なのでしょうか。いえ、この命で十分です。この愛で十分です。

イエスの「最後の説教」は、まさに愛の総仕上げにつながることばです。そして、その説教が始まる前にイエスが行ったことは、弟子たちの足を洗うという事でした。この足を洗うという行為もまた、イエスの愛の極みを現わすものです。

最後の最後まで ～極みの愛～

「イエスは夕食の席から立ち上がって、上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。それから、たらいに水を入れて、弟子たちの足を洗い、腰にまとっていた手ぬぐいでふき始められた。」（４，５）

当時、足を洗うのは、奴隷の仕事でした。それをいきなり師であるイエスが行ったのですから弟子たちの驚き戸惑う様子が見えるようです。イエスは、どのような思いで弟子たちの足を洗ったのでしょうか。ユダの足、ペテロの足、弟子一人一人の前に膝をかがめながら、その足に水をかけ、手を触れ、汚れを落とし、手ぬぐいで拭いている時、何を考えながら、どんな思いでいたのでしょうか。

あまりにも深いイエスの愛が、その手を通して伝わってくるようです。イエスと共に過ごした約三年間、その最後の最後に、イエスを裏切り、否定し、去っていく弟子たちに対して、イエスは最後の最後まで愛を貫かれたのです。

ペテロにとっては、イエスと共に歩んだ道の結末は「イエスと絶交した」で終わっても仕方のない者です。しかしイエスは、それで終わらせませんでした。むしろ、それを始まりに変えてくれました。ペテロがそれでもなお立ち上がったのは、イエスが祈っていてくださり、イエスの愛は終わらなかったからです。そしてペテロは、最後の晩餐においてイエスの愛を残すところなく聞いていたからです。それに対してユダは、最後の晩餐の途中でその場から離れてしまったのです。彼はイエスの話を最後まで聞いていないのです。彼は自分の最後を「イエスを裏切った」で終わらせてしまったのです。

私たちは、自分で自分の最後を決めてはならないのです。私たちの最後は、私たちを最後の最後まで愛し抜いてくださったイエスの愛で締めくくられるべきなのです。ある意味、私たちにとって今日が最後の日です。もし明日があるとするなら、それは神によって新しく造られた日です。今日という日の最後の締めくくりが、イエスの愛で締めくくられる日でありますように。

イエスの手が自分の足に触れ、洗ってくださったことの意味を知り、イエスの愛を極みまで、残すところなく受け取りたいものです。

イエスの御前に足を差し出す

「こうして、イエスがシモン・ペテロのところに来られると、ペテロはイエスに言った。『主よ、あなたが私の足を洗ってくださるのですか。』イエスは彼に答えられた。『わたしがしていることは、今は分からなくても、後で分かるようになります。』ペテロはイエスに言った。『決して私の足を洗わないでください。』イエスは答えられた。『わたしがあなたを洗わなければ、あなたはわたしと関係ないことになります。』シモン・ペテロは言った。『主よ、足だけでなく、手も頭も洗ってください。』」（6～9）

このイエスとペテロのやり取りは、よく理解できると思います。師であるイエスに足を洗ってもらうなど考えられないことです。しかしイエスは言われました。「わたしがあなたを洗わなければ、あなたはわたしと関係ないことになります。」

私たちも、もしイエスに足を洗っていただかなければ、イエスと関係のない者になってしまうのです。それは困ります！

私が以前仕えていた教会では、一年に一度“洗足式”がありました。牧師が信徒の足を洗うのです。しかし、多くの人が、とても強く遠慮されます。ぶっちゃけて言えば、水虫の人もいれば、足の匂いが気になる人もいます。男性に触れられるのが嫌な女性もいます。洗ってもらう側にとっては、かなりハードルが高いと感じました。

ましてやイエスに足を洗っていただくことなど出来るのでしょうか。私たちは、汚れた足をそのままイエスの前に差し出すことが出来るのでしょうか。でも、もし洗っていただかなければ「関係ない」と言われてしまうのです。

あなたの一番汚いところを、一番醜いところを、一番暗罪深いところを、そのところをイエスの御前に差し出すのです。それを洗い清めるためにイエスはしもべとなってくださったのです。それがイエスの十字架です。この洗足の出来事には、まさにイエスの極みの愛、十字架が予表されているのです。

ペテロの、それなら足だけではなく手も頭という応答はなんとも微笑ましいものです。それほどイエスを想っていたのです。しかしペテロは、この数時間後、イエスと私とは何の関係もありませんと見事にイエスとの関係を切るのです。ペテロの生涯における最大の汚点です。

「わたしがしていることは、今は分からなくても、後で分かるようになります。」とイエスは言われました。その通り、ペテロは後で分かったのです。あそこで足を洗っていただいたことは、十字架による罪の清めを現わしていたのだと。その時、自分にとっての最大の汚点が、神の愛を最大に経験する、恵みの点となったのです。

“互いに” という恵み

「主であり、師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのであれば、あなたがたもまた、互いに足を洗い合わなければなりません。わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、あなたがたに模範を示したのです。」（14, 15）

イエスは、「互いに足を洗い合いなさい」と言われました。どちらか一方が洗われ、洗うという関係ではありません。お互いなのです。自分が洗っていただき、また洗うのです。

あなたは、感謝をもって他者に足を洗っていただくことができますか？ つまり仕えてもらうことです。逆に喜んで他者の足を洗うことが出来ますか？ それは仕えることです。この両方があるときに、私たちの関係は美しいものになります。

しかし、ある場合には、どちらか一方に偏ることがあります。他者のために仕え、犠牲を払って助けることに力を発揮し、実にイキイキと活躍しているのですが、いざ自分が助けられる立場に置かれると、その助けを極端に拒否する方がいます。他者のためのとりなしの祈りを熱心にするけれども、自分から祈りのリクエストを出して祈ってもらうことは苦手です。そのような偏りがあると、他者との健全な関係を保つことは困難です。例えば、助けている相手が元気になり自分の意志で人生を歩き始めると、その途端に関係が壊れるということがよくあります。それは、表面的には他者に仕えているように見えますが、実は仕えるという行為によって、自分のクリスチャンとしての存在価値を確保し、相手をそのために利用しているのです。仕えることとは逆です。

逆に仕えてもらってばかりで、自分は仕えることはしないという方もいます。自己愛が極端に強く、してもらって当たり前、自分の期待通りにしてくれないと不平不満を言い出し、この教会には愛がないと言い出すのです。このタイプの方は、実に困った人になります。

仕えるだけの人も、仕えてもらうだけの人も、現れは両極端ですが、根は同じです。イエスに足を洗ってもらった経験がないのです。経験がないということは、イエスと関係がないということです。関係がないということは、泉が枯れているのと同じです。イエスからの

愛、喜び、平安が内側から湧き上がることがないのです。ですから、満たされるために仕え、あるいは仕えさせるのです。

「互いに足を洗い合う」ということは、お互いの関係を健全に保ち、保つだけではなく神の国の影響を周囲に拡げていくことになります。

私たちは、まず自分自身がイエスに足を洗っていただくという経験をさせていただきましょう。イエスの御前に、最も汚れ、醜く、罪深いところを差し出しましょう。具体的には、それを主の御前に告白という形で表現しましょう。

そしてそのところに、イエスが、水をかけ、手で触れ、洗ってくださったこと、つまり十字架の血によって清められたことを信じましょう。

「御子イエスの血がすべての罪から私たちをきよめてくださいます。」(1ヨハネ1:7)

さらに、そのイエスの手から伝わる、主の想いを受け取りましょう。イエスは、どんな想いで、あなたの足に触れていてくださっているのでしょうか。

私たちは、仕える喜び、仕えていただく感謝、互いに足を洗い合う者たちでありたいと願います。

「それを行うなら、あなたがたは幸いです。」(17)